ようこそ校長室へ！
Ｎｏ．39
令和５年11月20日
発行 ： 貝塚 敦
に にこにこ笑顔で い いつもみんなで つ 紡ぎ繋げる心で に 日本一をめざすのだ

転職して天職にたどりついた私

「教育」「勤労」「納税」。これは国民の三大義務です。よって、特に進路を目の前にする３年生の担任をすると、教え子が将来どんな職業に就くだろうかということも思い巡らしながら進路指導にあたっていました。

担任をしていた頃は、「この子はいかにも“ねじりはちまき”が似合いそうだ」などと思うと、その生徒をつかまえてはこう言ったものです。

「おまえは将来、寿司職人になれ。雰囲気がピッタリだ。雇われ職人ではだめだ。修行を積んで、自分の店を構えるまで必死に頑張るんだ。そこに、かつての恩師である俺が店を訪れ、腹一杯寿司を食べる。『いやあ、うまかった。お前も一人前に成長したな。うれしい限りだ。』『ありがとうございます。』『それじゃあ、お勘定。』『先生から頂くわけにはいきません。今私があるのも先生のおかげです。』とまあ、こんな調子だ。どうだ、寿司職人になる気はないか。」

「・・・・・・？考えておきます。」　教え子の中には、自分で飲食店を経営している人間もいれば、飲食店で働いている人間もいますが、まだ寿司職人をやっている教え子だけは、私が把握している限り一人もいません。とても残念です。私が、声をかけた教え子に限って、寿司を握らず、寿司の代わりにハンドルを握って、運送会社等のドライバーになっています。

まあ冗談はさておき、これまでの教え子の全てがどんな職業についているかはもちろん把握してはいませんが、感覚的に、特に女子生徒は看護や福祉関係の仕事に就いている割合が多いとの印象をもっています。当校でも、医療関係や福祉関係に勤務の保護者の方が少なくないと思います。

コロナ禍のこのご時世だからこそなおさら、シフト勤務等でご自身の体調管理もたいへんな中で、医療・福祉の激務をこなす方々、その第一線で奮闘している皆さんには、心から敬意を表します。本当に頭が下がるばかりです。

職業に貴賤はなく、もちろん楽な職業などはないでしょうから、いかなる職種であろうと、勤労とは厳しくもあり尊くもあるものだと思います。

私が初めて３年生を担任したときのクラスにこんな女子生徒がいました。その子は、学力だけで考えれば、もっと別の高校に進学でる選択肢もたくさんあったのですが、家から歩いて通える一番近い公立高校に進みたいと申し出ていました。父親を早くに亡くし、看護師の母親と親一人子一人の家庭で育ったこともあり、家事をして母親の助けになるのを優先したいこと、そしてギリギリで進学した学校の下の方でくすぶりよりは、希望する学校ならかなり上位の方でいられそうなので、かえって進学や就職にも有利に働くのでは、という考えだったからです。
そして、将来は母親と同じ看護師志望という思いで、一貫してその進路選択に迷いはありませんでした。進路の最終判断の三者面談で、互いに納得し見つめ合う微笑ましい母子の姿は、今なお脳裏に焼き付いています。

さて、進路指導をしていると、生徒や保護者から、「いい高校に入りたい」という言葉をよく耳にします。一体「“いい”高校」とは何なのでしょうか。
一般的な推測では、「学力が高い」「評判がいい」＝「いい」とかの意味で使用している人も少なからずいるのでは、と勝手ながら想像してしまいます。
しかし、東京大学を卒業した私のある知人は、成人してしばらく職を転々とした後、いつのまにか引きこもり状態になり今もなおその状況は続いています。逆に、中学生の頃、まるきり勉強が苦手で「俺が入れる高校なんてないよ」と泣きながら相談にのってくれと懇願した幼なじみは、今や大きな会社を経営し、私の何倍もの年収を稼いでいる地元の名士です。
何が幸せの尺度か人それぞれではあるでしょうが、「いい高校」というよりは、「いい人生」に向けた進路の実現であってほしいということは言うまでもありません。

中学校では、教育計画の中に、「キャリア教育」を明確に位置づけています。特に総合的な学習の時間を柱に、様々な外部講師や諸団体を招いて職業講話や体験活動をしたり、職場体験活動をしたりす

るのもその一貫です。職場体験など昔はなかったカリキュラムですが、今やどの中学校でも定番です。
　しかし、職業選択の参考として、生徒にとって一番身近な存在なのは、自分自身の家族ではないでしょうか。実際、先に述べた女の子も、母親の姿を見て自分が思い描いた進路を実現し看護師となったのです。
　親の背中を見て子は育つ、は正論です。しかし、はたして、子どもは自分の親がどんな職業で、その仕事にどんなやりがいをもち、どんな苦悩があるのか理解しているのでしょうか。ぜひそれを親から子に語ってもらう、あるいはできれば親の仕事を実際に子どもに見せることこそ、家庭でできる最大のキャリア教育であると思います。親は、一番身近な職業人としての大先輩なのですから。

　私の実家は自営業で、汗水流して朝早くから夜遅くまで働く両親を常に間近で見て育ちました。両親の喜怒哀楽や商売上の苦悩を毎日肌で感じることは、自分の人間形成に大きく影響したと思います。
　後に高校教師になった長兄は、学者タイプで人付き合いが下手な人間なので、いずれ家業を継ぐのは、次兄か三男坊の自分のどちらかだと、子どもながらに思っていました。
　しかし、結局、次兄が大学卒業と同時に家業を継ぐことになりました。家族・親戚で何らかの話し合いがもたれた形跡もなく、父や母の指名でもありませんでした。何となく当たり前のようにそうなったのですが、異論を挟むものは誰もいませんでした。三兄弟それぞれの適性、性格、個性などを熟知している周囲の者にとっては、誰もが納得する結論だったと言われています。
　銀行員を５年経験し教師になった自分ですが、大学を卒業してすぐに教師にならず一度は民間の仕事に就いたことも、そして、家業を兄貴が継いだことも今では正解だと思っています。なぜなら、教師は自分の天職だと思えるからです。すばらしい教え子や保護者や先生方との出会いは、私の何にも代え難い人生の宝です。

　大学で教職課程をとった娘に、「学校の先生ってどう？」と聞かれたことがあります。「自分の人生は自分で決めろ。」と言い放ちました。「もちろんやりがいはある。人の人生を左右する重要な仕事だから。でも難しい世の中になってきた。特にこれから学校の先生をめざす人間は、それ相当の覚悟が必要だ。」と付け加えました。